

学生とのコミュニケーション不足



工学博士 塚本 寛
九州工業大学大学院
生命体工学研究科 教授

地方国立大学で教育と研究をしている我々の研究室での話である。

ここ数年、大学院生でありながら研究室にこない学生が現れた。電話やメールで来るよう促しても来ない。止むを得ず、親に連絡を取り、取り敢えず、来させる。やっと現れるが、長くは続かない。こんなことを繰り返し、やがて大学を辞める。あるいは、やっとのことで修了する。研究に興味を沸かず、研究室に出掛ける意欲が欠けているのか。学生の気持ちを知りたい。

研究室の雰囲気がおかしい。学生達の間には気の合う仲間だけのグループが出来上がっている。派閥抗争と騒ぐほどではないが、グループに属さない学生との間が不透明である。何かと、グループで一塊になる。いきおい、グループ外の者は研究室から足が遠のく。グローバル化が叫ばれるときに、異文化集団を許容できないのか。学生たちと話し合いたい。

常日頃から、「ホウレンソウ（報告・連絡・相談）」と口を酸っぱくして言っている。しかし、定期的な連絡や相談はなく、トラブル発生とか期限間近とか土壇場になってからやって来るケースが多い。結局、時間切れで何事も中途半端に終わる。こんな状況では、とても、学生を当て込んだ産学連携の共同研究なんぞ企画できない。学生とのコミュニケーション不足は深刻である。

こんな状況に陥ってしまって、反省させられる。学生たちに接する時間が足りないのだ。若い頃は学生と触れ合う機会も時間も多かったが、年と共に、学生との距離も開き、接する機会も時間も大幅に減ってしまった。研究科長など学内行政に係わっている間に学生と接する時

間が少なくなってしまったのが痛い。学生には、講義や試験に加え、教員による個人授業が重要であることは十分認識していて、それに応えるのが、研究室における研究活動のはずであった。我々と学生の研究室での交流は、人材育成のみならず、研究成果の向上にもつながる。ところが、我々の方は、今や、それ処ではない。

大学の教育研究や管理運営に競争原理が導入され、大学設置基準の大綱化(=規制緩和)、大学院重点化、国立大学の法人化、大学評価基準の実施など、大学をめぐる状況の変革が著しい。それらに対応した業務が加わり、我々教員は大変である。研究費の配分についても、以前の一律配分方式では、最低限の教育研究はできるという一定の安心感があった。今や、均等配分型の予算は縮小され、科研費などの競争資金の獲得に失敗すると直ちに研究に支障を来すようになって、研究室崩壊の危険に晒されている。研究費のある程度の集中投下は必要だが、研究費がゼロになって研究室そのものが崩壊してしまうのは問題である。かくして、各種予算獲得のために時間を割かざるを得ないこととなる。それだけ学生と接する時間が削られることとなる。人材育成には明らかにマイナスだ。

このような状況は地方国立大学で教育研究を行う我々の研究室だけの現象と思いたい。

英国のケンブリッジ大学は教育と研究のバランスが良いことで有名で、ケンブリッジ大学の強さの源泉は「教授と学生の近さ」にあると何かで読んだ。通常の講義や試験が行われるユニバーシティ(大学)とカレッジ(学寮)制度があり、カレッジでは教授による個人教授を柱にしていると言う。この制度によって優秀な人材が育つので、ここから優秀な人材や新しい技術の芽を得ようと、ケンブリッジ近隣に進出する企業がどんどん増えているそうだ。日本企業との産学連携も活発なのはご承知の通りである。

たとえ状況は厳しくとも、我々は、学生とのコミュニケーションに、極力、時間を割くべきであろう。自戒の意味をこめてこの小文を記す。